

とりで

村社 祐太朗



A A F 戯曲賞
Aichi Arts Foundation Drama Award

登場人物（年齢は一場時点）

奏見容子（62）

奏見籐子（28）……容子の第二子長女

林秀真（34）……容子の第一子長男

林由利（34）……秀真の妻

林侑斗（6）……秀真／由利の第一子長男

林真帆（2）……秀真／由利の第二子長女

林貴雄（65）……容子の元夫

（左記の年齢は二場時点）

浜屋尚己（30）……籐子の彼氏

第一場

晩夏。葛飾区の狭小住宅の前庭。シナヒイラギの生垣が通りの目を遮っている。窓が開け放たれていて、板の間にはキャンプ用のローテーブルがある。

容子が板の間に座り、窓の外に足を投げ出している。竹ざるを膝の上に立てて、その網目を見たり庭に目をやったりしている。

籐子が、くず餅の入ったガラスの小鉢を両手に持って奥からやってくる。

籐子 はい。前にさ、シンクが汚れにくくなる薬のこと話してたよね。

容子 薬？ ああ。

ワックスか。シンク全体に塗って何時間か置くと、水垢がすぐにはつかなくなるっていうワックスの話してたでしょう。

容子 うん。

籐子 あれは今使っていないんだ。

容子 え？ どうして？

籐子 シンクが大分汚れてるから。

容子 嘘、汚れてる？

籐子 いやちょっとね。

容子

カレイの血かな。

藤子

血か。汚れがもう少し赤茶けてるから、掃除をしないんじゃないじゃなくてむしろキッチンを長く使っていないのかなと思ってる。ちょっときょつとしちゃった。

容子

昨日は気を失うように寝たからさ。

藤子

カレイは何にしたの？

容子

煮付け。

藤子

へえ。ご飯は食べた？

容子

少しだけ。カレイが煮立ってから、最後にはうれん草を二束切って、脇に突っ込んでじゃえばね、それで野菜も摂れるから楽だよ。

藤子

美味しそうだなあ。お母さんさ、食べる専門の方になること、これまでそうなかったでしょう。

容子

食べる専門。子供のときはそうだよ。

藤子

子供のときを抜いたら。

容子

あるよ他にも。お父さんは若い時によく料理したし、あと秀が高校生のとき、家のご飯全部作るって言ったことがあったでしょう。

藤子

覚えてないな。

容子

理由は訊かなかったからよく分からなかったけど、それでも２ヶ月続いて、ある日からまた食べる専門の方に戻った。

藤子

なんだよ。

容子

なんだっけな。おからハンバーグだっけな。すごく美味しくて、みんなで感想を言い合うようなメニューがいくつかあったんだよ。あれが羨ましかった。

藤子

(眉間に皺を寄せて頷く) へえ。

容子

片付けはね、昨日はお酒入ったから後回しにしちゃった。

鳥が二羽、立て続けに庭に降り立つ。

ほんの一瞬で少しの収穫を得て、鳥が二羽とも飛び立つ。

藤子は鳥が羽ばたく時、避けるように身体を折る。

藤子

またお酒飲んでるの。

容子

昨日はたまたま。

藤子

やめたんじゃないかったの。

容子

本当にたまたまだよ。久しぶりに。

藤子

心配だなあ。

容子

秀は何時だっけ。

藤子

もうそろそろくるんじゃない。サエキさんにだけ寄ってくるって言ってたけど。

容子

何しに？

藤子

なんだろう。新車買おうと思ってるのかな。

容子

新車？ 中古車屋で？

藤子

いや、買い換えようと思ってるのか。秀の車って結構古くて、Bluetoothのスピー

容子

カーが自前で天井につけてあるんだよ。

藤子

でも車持ったのってつい最近じゃなかったっけ。

容子

一昨年じゃない？ 真帆が生まれるって買って買ったんじゃないっけ。

藤子

中古だったってこと？
そうそう。

ガラスの小鉢が空く。

藤子

たまに食べると美味しいよね。

容子

うん。

藤子

お母さん船橋屋のしか食べないよね？

容子

えっと。コンビニやスーパーで買うときもあるよ。

藤子

ああそうなんだ。

間

容子

あ、栗も茹でてあるけど、食べない？

藤子

栗。

容子

(立ち上がって竹ザルを手に奥へ向かう) 先週くらいからスーパーに並び始めて、最初に見つけたときは迷わず買ったよ。

籐子

栗は、買ったことないな。

容子

そう。わたしは買ってくるどぎつとまとめて茹でて、冷蔵庫にいれておく。多分2回くらい買いいすすよ、ひと秋に。

籐子

へえ。私が居た頃はそんな習慣なかったよね。

容子

ぱっと口に運べるものがあると、ああ用意しておいてよかったって思うの。先月はそれがこんにゃくゼリーの凍らしたやつだったんだけど、涼しい日が増えてきたから栗に変えたわけ。多分順繰りに、今後も、なにか試すと思う。

籐子

そう。

容子

そうだ。

玄関(引き戸)の開く音が聞こえ、容子が口にした「そうだ」がやり過ぎさる。続けて秀真の声が奥からする。

秀真

お邪魔します。

籐子

きたきた。(立ち上がって奥へ消える)

間。

秀真が奥からやってくる。

秀真 どうも。どう調子は？

容子 久しぶりだね。おかげさまで、変わりなく。

秀真 由利がこの間の鍋、ありがとうございますって。

容子 ああ。趣味合えばいいけど。

秀真 やたらね、煮物が増えた気がする。最近。

容子 本当に？ あはは。それはよく分かる。なんか取り回しがきくんだよね。見た目より少し軽い感じがして。

秀真 結構使ってるんだと思うよ。あれって匂いがつかないんでしょ。

容子 まあ比較的ね。あの鍋の行き場所があつてよかった。きいてみるもんだね。

秀真 そっか。確かに。わかんないもんだね。

容子 本当。

秀真 (腰掛けて) その部屋、いつまで空っぽにしておくの。

容子 ああ。でも不便してないから。

秀真 テーブルひとつないんじゃない、誰か来てもゆっくり話せないだろ。

容子 いや、これで十分(キャプテンスタッグのローテーブルに触れて)。誰がきてもここに案内するから、案外事足りるんだよ。

秀真 そっか。

容子 多田さんなんて、三時間位話していくよ。

秀真 ああそう。多田さん仕事はしてないんだ。

容子 母親の介護があるからね。月の半分は施設で寝泊まりするらしいんだけど、残りの半分は彼女が、食事は準備しなきゃならないみたい。

秀真 ああそう。

容子 (庭のベンチを示して) あそこに二人で座ることもあるよ。そのときもこれを持って行って、お茶菓子なんか置いてね。

秀真 ああ良さそうだね。

容子 この頃は、虫がよく鳴くようになって。話すことはたくさんあるんだけど、どこ一方で間も持つ。私は読書をして、彼女はPSPをやって、なんてときもあるし。へえ。PSPか。

秀真 あるでしょ？ (携帯ゲーム機を操作するジェスチャー)
うん。

間。

秀真 うち、あそこ川沿いでしよう。それで騒音が少ないのか、4階でも結構聞こえるよ、虫の音が。下は駐輪場なんだけど、住人がぐるっと回れるようにちょっとした緑道になってるっていうのもあって。結構聞こえるね確かに。言われてみると

そうだ。

間。

秀真

(庭の方を手で示して) ちょっと座ってみてよ。

容子

どうして。

秀真

いや見てみたくて。

容子は立ち上がって歩き、下手に消える。

秀真

(笑って) 庭があるの、やっぱりいいね。

容子

∴。

秀真

(少しぎょっとして、庭の方を指差す) それは？

容子

コブシ。

秀真

そんな立派なの、植わってたっけ。

容子

年末に植えたのよ。

秀真

そうなの？ ひとりでやったの。

容子

コーナンの人が手伝ってくれた。

秀真

そうなの？

容子 好意でね。多分。
秀真 へえ。

藤子がガラスの小鉢を持って戻ってくる。

藤子 なにやってるの。

秀真 庭に、藤子は何か植えないの。

藤子 どうして。

秀真 せっかくあるから。

藤子 でも手入れがね。

秀真 いまも親父が来てやってるんでしょ？

藤子 そうなんだって。これ船橋屋のくず餅ね。

秀真 ありがとう。

藤子 草をまだ筆ってるんだって。(容子に) 蚊いないの。

容子 いるよ。

秀真 じゃあ、あのカートまだ現役なんだ。そうだ、失礼ちょっと車に忘れ物した。

秀真が立ち上がって奥へ消える。

容子が剪定バサミ片手に戻ってくる。

籐子 一人だったね。

容子 ねえ。

籐子 お母さんが「大事な話がある」なんて言ったから、秀真も気を遣ったんじゃない

かな。

容子 そうかな。

籐子 わたしだってメールがきて、まず「どういう顔して行ったらいいんだろう」って

思ったよ。

容子 そうか。

間

容子 ごめんごめん。誤解を招いたなら。

籐子 まあ。

容子 多分大した話じゃない。ただまとめて話さないと、二人にちゃんと考えてもらえないんじゃないかと思って。

籐子 どういうこと？

玄関が開いて閉まる音がする。間。

容子 (息を長く吐く)

秀真 これ、由利がお返しだって。

容子 いいのに。(紙の包みを受け取って透かして中を見る) ああ、流石は由利さんね。

わたしもこの白雪ふきんをもうずっと使ってるの。

前にその話をしたんだって言ってたよ。

秀真 あそう? ああ氣遣わせちゃって、申し訳ない。ありがとう。

容子 (頷く)

藤子 (藤子に) これすごく持つんだよ。藤子も使ったら、多分びっくりするよ。

へえ。

三人並んで板の間に座る。

藤子 あれそうだ、物干しは?

容子 そう物干しね、処分したの。今は二階に干せば間に合うから。

藤子 わざわざあれ、捨てたの?

容子 (頷く)

捨てられるんだね。

容子 それに、この庭がぼっかり開いてると、気分がいいんだよね。

藤子 はあ。

容子 あとお母さんこの家でね、犬を飼うことにしたの。

藤子 犬。そうなの？

容子 そう。それが大事な話。

藤子 そうなの？

秀真 はは。犬を飼うなんてずいぶん唐突だね。ただまあ気持ちは分かるよ。

藤子 なんでよ。

秀真 この家は広すぎるよね。

容子 そう？

秀真 物も一向に増えないし。

容子 そうか。

藤子 寂しくて犬を飼うの？

容子 違う違う。日垣さんが来月、堀切の都営に引っ越すんだけど、そこではペットを

飼えないらしいの。それでこの間、私しか頼る人がいない。話を聞いてって言わ

れて。マルオっていう子なんだけど、マルオのことは前から知ってたし、比較的

落ち着いた子だし、結構真面目に考えてみて。まあ飼ってみようかなと思って、

この際。そういうひよんな話なの。どう思う？

どう思うってもう決めたんでしょう。返事もしたんでしょう。

うん。

容子 何犬なの？

藤子

容子 ミニチュアシュナウザー。写真みせようか。

容子はスマートフォンを少し操作してから秀真に渡す。

容子 4歳になったばかりらしい。日垣さん、知らない人の手に行ってしまうのは

ちよっと、なんて言うんだよ。

秀真 なんでそんな思い詰めてるの。

え、思い詰めてる？

容子 (頷く)

藤子 (スマートフォンを受けとって) この子か。かわいい。白い。

容子 私はいつまで飼えるのかなと思って。

秀真 泣いてるの。

容子 泣いてはないけど、七十五になったら、わたし大丈夫なのかなと思って。

秀真 ああ、考えてもみなかったな。母さんが何かできなくなるなんて。

藤子 ∴。

容子 いいよ飼うようちでって返事した日から、北砂でリハビリしてる場面を夢にみる

ようになつて。びっくりしたよ。

藤子 なんか、単純じゃない。

秀真 それはどんな場面なの。

容子

スーパーに行つてやるプログラムで、退院するもう数日前なの。渡されたメモ用紙にバターロール、食器用洗剤、鉛筆って書いてあつて、一人でそれを買ひ揃えて病院に戻らなくちゃいけないんだけど、鉛筆がどうしても見つからない。結構長い時間探すんだけど。で、リハビリの先生に肩を叩かれて「終了です」って言われる。でもその人が誰だか一瞬分からなくてっていうところで起きる。

(頷く)

秀真

それ実際にやつてたよね確か。

容子

そうそう。でも「終了です」って言い方ではなかったような気がする。

籐子

(笑つて) ショックだったつて随分言つてたよね。

容子

見つからないんだもんだつて。

籐子

でも今は買えるでしょう。

容子

多分ね。

秀真

そのマルオはいつ来るの？

容子

明日。

秀真

明日！ じゃあまた明日来ようかな。何時くらい？

容子

日垣さんたちは、二時にいらっしやるつて言つてたかな。

秀真

じゃあ侑斗と真帆も連れてくるよ。

容子

由利さんも用事なかったら。

秀真

どうかな。明日は自由な日だから。

秀真は立ち上がり、空いた小鉢を持って奥へ消える。

籐子

何かあったら頼ってね。

容子

ありがとう。

幕

第二場

第一場から5年後の梅雨。

生垣の一部が門戸に置き換わっている。

シナヒイラギの生垣の間から、二箇所、青い紫陽花が顔をのぞかせている。

18時でまだ外は明るく、庭の自動点灯式のライトは点いていない。

浜屋がここに置いて行った手土産と荷物は唐揚げ、マルセイバターサンド、エトボスのトナー、ユニクロの新商品パンフレット、手製のアスパラの浅漬け、チューブパウチ入りの塩麴。

容子は庭に降り立っている。板の間に対して斜になっており、板の間には青みがかったガラスのカラフェが置いてある。

由利が部屋の奥に現れて、容子に近づく。

由利 このお部屋より、屋上の方が人の手が入ってるみたいですね。

容子 そう？

由利 違うんですか？

容子 どうだろう。先週あの人 came ときは、その下生えを整えてたよ。

由利 あのカキ梗が植わってるところ。

容子 どうだろう。

由利 確かに、切りそろえてありますね。

容子 2時間くらいやってたんだよね。小雨が降ってたのにさ。

由利 何か話したんですか。

容子 そうだね。

間

容子 マルオのことを話したら、結構寂しがってた。

由利 そうですよね。

容子 でも数えられるくらいしか会ってないと思うんだけど。

由利 そうですか。どんなふうだったんですか。

容子 (由利の目を覗き込んで) 普通だよ。寂しくなるな。私に、やることなくならないか、とか。あとマルオのリードは、あの人が買ってくれたものだったから一応必要かどうか聞いて、驚くべきことに持って帰って使うって言うから。それで今日リードを付け替えなくちゃならなくなったの。

由利 ああ。

容子 テレビ台に置いてあるでしょう。

由利 (部屋を振り返って) …。新しいのは、何色でしたっけ。

容子 それみたいに地味なやつじゃなくて、なんていうかな。

由利 藤子ちゃんが選んだんですかね。

容子 きっとそうじゃない。

由利 あんまり気にしてなかった。

容子 良く似合ってたしね。

由利 このグレーも良かったですよね。

容子 そう、本当に何かに使えるのかな、そういうのって。

由利 なんですかね。

配達員 こんにちは。

門戸の前に佐川急便の配達員が立っている。

容子 ああ、ありがとうございます。

容子は門戸に近づいていくが、歩みはゆったりしている。

配達員 サインはいらないんで。(小包を容子に渡して) ありがとうございます。

容子 お世話様です。

容子はまた、同じくらい緩慢な歩みで軒先に戻る。

由利 秘密なんですか。

容子 いやそんなことないよ。これは上等な明太子。

由利 しまいますね。

容子 ありがとう。

由利 (部屋の奥に消え、また戻ってくる) そうじゃなくて。リードの使い道ですよ。

容子 私は、訊かなかったからなあ。

由利 今度会ったら教えてもらおう。

容子 由利さんは日曜日お休み？

由利 はい。

容子 明後日は昼ごはんを食べにくるらしい。よかったら来たら。

由利 はい。嬉しい。侑斗の教室が終わったらその足で寄りますね。13時には着きます。

容子 スケートボードの教室？

由利 はい。オリンピック選手になる予定の。

容子 あはは。

由利 江戸川駅のすぐ側なんです。行きは秀くんが送ってくれています。

容子 ああ、そう。

由利 誘ってみますね。昼ごはん行くけどって。

容子

ぜひそうしてください。

間

容子は板の間に腰掛け、カラフェを手に取りグラスに水を注ぎ、水を飲む。

由利

もらったマルセイバターサンド、食べましょうか。

容子

ええ。

由利

(奥の部屋から) どうしてマルセイバターサンドなんだろう。

容子

アンテナショップで買ったんだそう。亀戸にアンテナショップがあるって言うん

だけど本当かな？

そうでしたっけ。

容子

彼は、特別ああいうところ好きなんだと思う。

間

容子

コスメとかお惣菜、ユニクロとかが一堂に会している場所がき。

由利

この塩麴は？

容子

それは浜屋くんのだって。

由利 このタッパーはなんですか。

容子 それはアスパラの浅漬けだって。

由利 アスパラの。

容子 それも頂きましょう。それは私に作ってきてくれたの。

由利 す、すごい。黄色いお皿に出しますね。

容子 うん。

容子は顔の前で手を振り羽虫を避ける。また大きく鼻で吸って周りの臭いを嗅ぐ。

薄手の綿のスカートを膝までたくし上げて膝裏を掻く。ただ視線はぼうつと庭の中ごろに落ちている。

由利が黄色い皿と直径10cmほどのシャーレを手に、軒先にやってくる。

由利 どうぞ。

容子 すいません。

由利は、置いた皿を挟んで容子の隣に座る。

容子は刺してあった楊枝をつまみ、アスパラを口に運ぶ。

容子

美味しい。

由利

ああ美味しい。

間

由利

真帆も、スケートボードをやりたいって言うんです。

容子

ああ。

由利

怖くないんですね。

容子

(頷く)

由利

結構高いんですよ。子供用とはいえ、登るところは。生垣くらいの高さです。

容子

それは、勇気あるね。

由利

そうですね。

容子

結構やってるんですか、女の子も。

由利

1年生はいなかったですけど、4年生くらいになると本当に半々なんですよ。

容子

ああ本当に。

間

由利

藤子ちゃんは、秀くんを真似しましたか。

容子

そうね、何ってことはないんだけど真似る真似る。水着を入れる袋とか。衣装ケースの蓋のある無しとか。あとは、布団に入るまでにやることとか。

由利

(頷いている)

容子

あとね、初めて昼にカップラーメンを食べたことがあったんだけどね。町内会の運動会でもらったカップラーメン。あるんだから食べようっていうことになって、お湯を入れたの。そしたら籐子が秀の塩の方、青い方が良い匂いがあるって泣き出したの。箸がからから落ちて、わたしは嫌味っぽくため息したんだけど、秀が取り皿を4枚出して解決っていうことがあった。なんの話でしたっけ。

由利

もとの籐子ちゃんのは、醤油味ですか。

容子

いやカレーだった。

籐子

(奥から) ただいま。

容子

おかえり。

籐子が奥の部屋に現れる。

籐子

ただいま。

由利

籐子ちゃん、この間大丈夫だった？

籐子

由利さん、本当に急な話でしたよね。

由利

私達はありがたかったよ。

容子 藤子、浜屋さんは散歩に出てるよ。

藤子 そう。

由利 侑斗たちも連れて出てくれたの。

藤子 そうか。彼らはどうも波長が合ってますね。

容子 大分懐いてるのね。

藤子 二、三遊ぶ機会があったんですよね。今朝も二人に会うのが楽しみだ、なんて言っていて可笑しかった。

由利 侑斗はあの日を境にお風呂に凝ってて、いま入浴剤を買い集めてる。法典の湯に入ったあとは、脚が速くなったり、目が良くなったりしたって言うの。

藤子 あはは。

由利 二、三日そう。

容子 私も誘ってくればよかったのに。

藤子 だからね、あの日お教室の日だったんだよ。

容子 ああ。

藤子 もう懐かしいでしょう。お母さんたち別に住んでからは行ってないんじゃない。

容子 それでも二、三回は行ったと思う。秀が連れて行ってくれたこともあったね。

由利 ああ、ありましたね。

藤子は板の間に腰を下ろしている。

藤子 お父さん、マルオのこと何か言ってた？

容子 特別な。でもお父さんも寂しがってて意外だった。

藤子 そっか。

由利 ごめんね。うちだったら近くて、今まで通り会えただろうに。

藤子 そんなあ。わたしだって為されるがままなんです。尚さんがマルオにこうも心酔するとは思わず。

由利 うん。

藤子 そうですか。そうですか。と言っているうちにこの通りですよ。

容子 リード良いね。似合ってたよ。

藤子 気に入ってくればいいんだけどなあ。この一週間、根詰めて選んだんです。

由利 なんの柄なの？

藤子 あれは幾何学模様になった貝なんです。

由利 貝。へえ貝か。可愛いね。

藤子 聞きました？ あのリード、一昨日からここに泊まらせてたんですよ。

由利 へえ。

藤子 マルオはこだわりがあるので、前もボウルを替えた時、半日くらいご飯食べなかつたんだよね。

容子 そう。

藤子 リードとなると、また相当シビアだと思う。

由利　それで、この家の匂いを吸わせておいたんですね。

籐子　そうです。

容子　大丈夫よ。浜屋さんのことも信頼しているようだったし。彼は本当に優しそうな人だし。

籐子　優しい。人にも、動物にも。

由利　みて、浜屋さんがお義母さんにつってきたそうだよ。

籐子　え。

由利　浅漬けだよ。

籐子　へえ美味しそう。

容子　どうぞ。

容子の手差しを待たず、籐子はアスパラに手を伸ばす。

由利は立ち上がり部屋の奥へ向かう。

籐子のスマートフォンが鳴る。

容子　お父さん、来週も昼ごはん食べに来るって。

籐子　そう。

間

籐子 お教室は。日数増やせるって？

容子 きいてない。少し気が引けるんだもん。

由利 (お茶の入ったグラスを両手に奥から戻ってきて) お義母さん、お茶いただきました。

容子 はい。

籐子 ありがとうございます。

容子 月に2回通えない人もいるのに、私たちの提案はかなり身勝手でしょう。もう菊まつりに向けてグループ分けも済んでしまって、言い出すタイミングがそもそもないよ。ありがとうございます(由利が容子のグラスに水を注いだ)。

籐子 だからね、押田さんが区の担当の人に説明してくれたんだってば。向こうも気を遣って、お母さんから先生に直接相談してから話を通しますって待ってくれてるんでしよう。

容子 ああそう。

由利 籐子ちゃん、これも浜屋さんにくれたんだよ。

籐子 マルセイバターサンド？ どこで買ったんだらう。

容子 もう少し考えさせてよ。

籐子 (マルセイバターサンドを食べながら) 尚さんがうんちの袋忘れたらしいから持っていく。

由利 わたしが行こうか。

藤子 大丈夫です。今パンダ公園だった。

藤子は立ち上がって、奥へ消える。

容子 正直ね、マルオのケージとか、片付けなきゃならないものはたくさんあって、向こう一ヶ月は暇じゃないんだよね。

間

由利 お義父さんもここに住めばいいのって、私なんかは思います。

容子 マルオの次は、貴雄ね。

由利 あはは。

容子 藤子は正しいこと言わせると強いんですよ。もう何年も前、順天の先生に色々言われたことがまるで甞しているみたい。何もなくなっちゃって、この歳になれば僻みの一つ増えると思うけど。

由利 そうなんですか。

容子 そんなことないよね。

由利 はい。

容子 ありがとう。

由利 接木を教わっているなんて、そうそうあることじゃないですよ。

容子 あはは。

由利 そう思いませんか。

容子 秀は調子、どうなんですか。

由利 いま洗濯はやってもらってます。洗って干して、取り込むところまでがやっとです。

容子 そうですか。

間

庭のライトが点いている。

隣家の水撒きの音が聞こえる。

容子 一度、私をキャンプに連れて行ってくださいよ。

由利 キャンプですか。

侑斗 (部屋の内から) お母さん靴濡れた!

帰ってききましたね。(立ち上がって) 待って待って。

由利が小走りで奥へ消える。

容子は手を板の間につけてから、また庭に立つ。
門戸の方から犬の唸る声がする。

容子

マルオ。

了